

ヘーゲル哲学における導入と端緒について

真田 美沙 (社会学研究科 博士後期課程)

ヘーゲルにおける端緒(始元) *Anfang* の問題については、ヘンリッヒが『コンテクストにおけるヘーゲル』(1971)でとりわけ存在と無のかかわりから解明を試み、フルダは『ヘーゲル論理学における導入の問題』(第一版1965、第二版1975)において、『精神現象学』がヘーゲルの哲学体系のなかで果たした導入 *Einleitung* の役割を論じた。ヘーゲル哲学における導入と端緒は、このようにヘーゲル研究史のなかでもさまざまに論じられた問題である。そしてこの哲学の導入と端緒をめぐる問題は、ヘーゲル自身が『差異』論文のなかでも行ったラインホルト批判に根差している。

この問題は、90年代に入っても取り組まれ、ルーカスのヘーゲル講義録に着目した研究により、フルダの研究が「導入としての現象学」に重点を置くあまり、「予備概念」に重要性を認めていない点が指摘された。2013年と2015年に刊行されたヘーゲル講義録(GW23.1. 2.)が示しているのも、『エンチクロペディ』第一版(1817)と第二版(1827)の間、特に1823年のホトー講義録に収められている「形而上学・論理学」から1826年の筆者不明の講義録にかけての「予備概念」の変遷である。さらに、ボンデリの『ラインホルトにおける端緒の問題』(1995)は、『差異』論文でのラインホルト『19世紀初頭の哲学の状態を概観するための寄稿』に関する批判の妥当性や、それ以降の哲学の端緒と導入に関するヘーゲルのラインホルト評価の変化を論じている。

そこで、本発表では以上の研究の趨勢を鑑み、特に近年公刊された講義録から明らかになる知見をもとに、ヘーゲル哲学における導入と端緒について再考することを試みる。その際に、特に着目することになるのは、『エンチクロペディ』第二版・第三版と1823年から1831年にかけての講義録における「予備概念」、そして『大論理学』の「学は何からはじめられなければならないか」という節である。

1826年にヘーゲルはダウプ宛の手紙の中で哲学の導入の難しさについて次のように述べている。「私がそこで区別した諸立場[思想の客観性に対する三つの態度]の論述は流行の関心に適うようにという意図に基づいています。しかし私にとってこの導入はいつそう難しくなりました。というのもこの導入はただ哲学そのものの前に位置し、そのうちに位置するのではないからです。」ヘーゲルはこの導入の問題に後年も取り組んでおり、実際に、『エンチクロペディ』第二版では、その哲学の導入にあたる「思想の客観性に対する三つの態度」をより詳細に論じ、また『大論理学』存在論第二版でもこの導入の難しさに言及している。本発表では特に「思想の客観性に対する三つの態度」の三つ目の態度「直接知」における直接知と媒介についての記述と、『大論理学』第二版における学の端緒における直接性と媒介性の不可分さとの連関を明らかにすることを試みる。